

ドナウ の 四季

2017年・新春号・No.33

追悼:コチシュ・ブルターン	盛田 常夫	1
多様性を受け入れる社会へ	チャン・ホン・ホア	2
境界の存在(2)	プスタイ・ベアータ	4
アベノミクス理論の崩壊	盛田 常夫	6
世界水泳選手権お知らせ		8
留学生自己紹介	加藤 麻里	9
	浜野 允実	10
ブダペスト日本人学校	甘利 大紀	12
ブダペスト日本人学校 新入生(編入生)学校説明会案内		13
みどりの丘日本語補習校	野村 智子	14
	深町 やすこ	15

追悼：コチシュ・ゾルターン

盛田 常夫

いる。その夜は、ペーチで夕食を取り、自分で車を運転してブダペストに戻ったという。ブダペストに戻り、9月20日のCTで動脈乖離が見られ、即入院・手術となった。

長時間にわたる手術を終えたコチシュは、酸素を送り込むチューブで声帯が傷ついたために、声がほとんど出せなくなった。オーケストラのメンバーはこれで怒鳴られなくて済むようになったと、冗談とも本気ともつかない気持ちを吐露していたが、コチシュ自身も生死を彷徨って、人生観に変化がみられた。これまで批判を加えてきた音楽家に和解を乞う手紙を送り、怒りを抑えるようになった。もちろん、それで完璧主義の旗を降ろしたわけではなかったが。

その後、大腸がんを原発とする腫瘍が見つかり、発見された時にはすでに転移しており、治療が難しい状態だったが、このことは長い間、伏せられていた。腹水の定期的な吸引除去が施されたが、そのことも秘匿されていた。動脈乖離の手術時に、腫瘍が発見されていれば、治療できたのではないかという人もいるが、逆に無駄な治療を行わなかったからこそまで延命できたといえるかも知れない。神のみぞ知るである。

コチシュは政治的な発言を行う芸術家としても知られていた。最近では、高価なサッカー場の建設に邁進するオルバン政権にたいして、「せめてスタジアム1個分の予算を、音楽学校の支援に向けて欲しいもの」とインタビューで答えている。難民問題でも自説を語り、自分の意見を率直に述べる芸術家として知られていた。

多くの優れた音楽家を輩出してきたハンガリーにおいて、コチシュは戦後に生まれた音楽家のなかでもっとも傑出した天才的能力を発揮した音楽家であった。バルトークをもっとも良く研究し、理解していた音楽家であり、ハンガリー音楽界が失ったものは計り知れない。

11月19日、リスト音楽院でお別れの会が開かれた。何物をも恐れず、時の政権の政策批判すら控えることもなかったコチシュだが、ハンガリーが失った才能を惜しみ、大統領、首相、大臣が一同に参列する会になった。

(もりた・つねお 「ドナウの四季」編集長)

力を要求した。国立フィルの日常的な指導にあたっては、厳しい練習を課し、間違っただけでは容赦なく叱りつけた。そのため、精神安定剤を服用してリハーサルに臨む奏者が出るほどだった。通常のレパートリーに加え、あたたらに発掘した楽曲を積極的に手がけるために、オーケストラメンバーには厳しい練習が課されてきた。

コチシュの指導がパワハラにならなかったのは、ひとえにその音楽家としての天才的な能力にある。今年の春の雑誌インタビューでは、「声はまだ完全にだせないが、ピアノはこれまでのように弾けるし、フランクの交響曲は1日で勉強できるほど、記憶力は確かだ」と語っている。音楽家の多くは並外れた記憶力をもっているが、しかしコチシュの記憶能力は驚異的で、若い時からピアノのレコーディングを一発で終えるほど、譜面を読む力と演奏力は天才的だった。交響曲のバルティトゥーラ(総譜)はコンピュータのように頭に入っていた。だから、個別のパートの小さな間違いでも逃すことがない。どこがどう間違っているかを具体的に指摘されるから、奏者は反論のしようがない。オーケストラの技量はこのような厳しい練習から獲得されるのは間違いない。

もっとも、オーケストラのメンバーが音楽を楽しめるかどうかはまた別の事柄である。コンサート前のゲネプロにも多くの時間を割くことで知られており、これではコンサート時に力を十二分に発揮できないのではないかという危惧は各方面から寄せられていた。それほどまでに、楽曲の完璧さを求め、最後の最後の瞬間まで全力を尽くすが、コチシュの音楽家としての生き様だった。

最近ではシェーンベルグのオペラ「モーゼ」の未完の第三章を仕上げたブダペストで公演し、またシュトラウス・オペラの再発見を行い、それと並行して、ドビュッシーやバルトークのアルバム制作に勤しんできた。

動脈乖離は大きなストレスからくる高血圧によるものだと、コチシュは自覚していた。コチシュは音楽にかんして完璧主義者である。「能力のある奏者が努力しないで、その能力を発揮できないことに怒りを覚える」という通り、コチシュは国際的に知られた音楽家を敵に回すほど批判を加え、怒鳴ることすら多かった。「天才的な能力がない奏者には、それなりの対応をして、演奏会が成功するように心がけたが、天才的な能力があるにもかかわらず、努力しない者には激しい感情をぶつけてきた」と語っている。

ハンガリーの音楽家が惜しむように、コチシュは音楽家としての天賦の才能を備えていただけでなく、その能力を百パーセント発揮する勉強や努力を惜しまなかった。自らを最大限に追い込む完全主義者だったからこそ、自分が指導するオーケストラにも最大限の努

力を要求した。国立フィルの日常的な指導にあたっては、厳しい練習を課し、間違っただけでは容赦なく叱りつけた。そのため、精神安定剤を服用してリハーサルに臨む奏者が出るほどだった。通常のレパートリーに加え、あたたらに発掘した楽曲を積極的に手がけるために、オーケストラメンバーには厳しい練習が課されてきた。

コチシュの指導がパワハラにならなかったのは、ひとえにその音楽家としての天才的な能力にある。今年の春の雑誌インタビューでは、「声はまだ完全にだせないが、ピアノはこれまでのように弾けるし、フランクの交響曲は1日で勉強できるほど、記憶力は確かだ」と語っている。音楽家の多くは並外れた記憶力をもっているが、しかしコチシュの記憶能力は驚異的で、若い時からピアノのレコーディングを一発で終えるほど、譜面を読む力と演奏力は天才的だった。交響曲のバルティトゥーラ(総譜)はコンピュータのように頭に入っていた。だから、個別のパートの小さな間違いでも逃すことがない。どこがどう間違っているかを具体的に指摘されるから、奏者は反論のしようがない。オーケストラの技量はこのような厳しい練習から獲得されるのは間違いない。

温熱治療のパラダイムを転換する

温熱治療を根本から見直し、あるべき手法を示した著書。

曖昧な日常知を科学によって解明した画期的な著作。

オンコサーミア治療器は世界25カ国で利用。
ドイツでは百か所以上のクリニックで、
韓国の主要な大学病院に設置。

好評発売中。定価3200円+税。
大手書店、Amazonにて購入可。

第1章 ハイパーサーミアの歴史と評価

- 1.1 ハイパーサーミアとは何か
- 1.2 ハイパーサーミアの曖昧さと課題
- 1.3 ハイパーサーミアの歴史的概観
- 1.4 腫瘍治療のハイパーサーミア

第2章 ハイパーサーミアの物理学

- 2.1 電磁気学の基礎概念
 - (1) 電磁気現象
 - (2) 電場と磁場
 - (3) キャパシタ
 - (4) 位相シフト
 - (5) インピーダンス
 - (6) 電磁波
- 2.2 バイオ電磁気学
 - (1) 電磁波スペクトル
 - (2) バイオインピーダンス
- 2.3 「非熱」効果
 - (1) 非温度依存 (NTD) 効果
 - (2) 電磁場におけるNTD効果
 - (3) 電磁気による目標選択
 - (4) 電磁気と生体システム

第3章 ハイパーサーミアの生理学

- 3.1 生体におけるエネルギー、熱、温度
- 3.2 生体における温度制御
- 3.3 生体の加熱と体温
- 3.4 加熱による温度の分布
- 3.5 全身加熱と局所加熱の本質的な差異
- 3.6 加熱と冷却：リスクとその回避
- 3.7 温度測定と熱積算量 (ドーズ)

Heat Therapy in Oncology—Oncothermia
New Paradigm in Hyperthermia
Andras Szasz and Tsuneo Morita

腫瘍温熱療法—オンコサーミア
ハイパーサーミアのパラダイム転換— 医術から医学へ
サース・アンドラーシュ / 盛田常夫 [著]



日本評論社

第4章 腫瘍温熱療法

- 4.1 腫瘍温熱治療の基本概念
- 4.2 ハイパーサーミアの手法
- 4.3 熱の作用と併用効果
 - (1) 熱と血流
 - (2) ハイパーサーミアの併用効果
- 4.4 ハイパーサーミアの熱生成
 - (1) アンテナ放射
 - (2) 磁場 (コイル)
 - (3) 容量性カップリング
 - (4) 伝導加熱
- 4.5 ハイパーサーミア治療が抱える問題

第5章 オンコサーミアの理論と方法

- 5.1 電場の利用
- 5.2 細胞燃焼
- 5.3 腫瘍治療における細胞加熱
- 5.4 ミクロスコピック加熱
- 5.5 集束化の原理
- 5.6 温度の役割
- 5.7 安全性
- 5.8 積算量 (ドーズ)
- 5.9 臨床事例

第6章 自然療法としてのオンコサーミア

- 6.1 ホメオスタシスの復位
- 6.2 細胞の自然死の促進
- 6.3 細胞転移の阻止
- 6.4 転移がん細胞に作用

多様性を受け入れる社会へ

チャン・ホン・ホア

私は現在エルテ大学日本学科の修士課程に在学しています。来年度に卒業する予定で、修士論文のテーマには在日韓国・朝鮮人を選びました。なぜそういうテーマにしたのか、理由が二つあります。まず、私の専攻は元々、韓国学だったんです。正直に言うと、最初から興味を持って韓国語を習い始めたわけではありませんが、勉強すればするほど、その言語と文化が好きになって、卒業してからも韓国に関する勉強は何らかの形で続けたいと思っていました(勿論高校時代から大好きだった日本は今でも第一ですが)。

それから、もう一つの理由は私自身にあります。私は元々ベトナム出身で、ベトナムの名前を持っていて、両親もベトナム人ですが、二歳の頃に両親と一緒にハンガリー

に引っ越して、ずっとハンガリーで暮らしてきました。人生の中で今まで「君は自分が何人だと思えますか」と何度も聞かれたことがあります。やはり「自分でもよくわかりません」、「どちらかというどちらでもないですかね。いや、やはり両方ですかね?」というような曖昧な答えしか返せませんでした。そういう点で、私はアイデンティティの問題を抱えている在日韓国・朝鮮人に対し、親近感を感じました。在日韓国・朝鮮人も日本生まれ日本育ちなのに、韓国の習慣を持つ家庭環境で生きているので、完全な日本人でもないし、完全な韓国人・朝鮮人もありません。それで心の葛藤を招いているわけです。

ご存知の方も多いかもかもしれませんが、在日韓国・朝鮮人とはどんな人なのか、なぜ

日本で滞在しているのか、日本ではどんな生活を送っているのかについて簡単に紹介させていただきます。

まず、「在日韓国・朝鮮人というのは何か」から見ていきたいと思えます。簡単に説明すれば、植民地時代の朝鮮半島にエスニックなルーツを持つ人たちのことです。なお、在日韓国・朝鮮人はオールドカマーとニューカマーの二つのグループに分けられています。前者は植民地時代の朝鮮半島から無理矢理日本に連れ去られた人のことで、後者は1980年代以降に自分の意思で渡日した人のことです。現在日本で滞在している在日韓国・朝鮮人は二つの集団に属することができます。一つは、「在日本朝鮮人総聯合会」という集団です。北朝鮮を支持している在日韓国・朝鮮人の集ま



りて、彼らは在日朝鮮人として知られています。もう一つは「在日本大韓国民団」です。韓国を支持している在日韓国・朝鮮人の会で、彼らは在日韓国人と呼ばれています。実は、初めころは、前者に属していた人数の方が多かったですが、今は25%対65%の割合で、後者に属している人の数が上回っています。

次に、在日韓国・朝鮮人が日本に住み着くことになった経緯を簡単にまとめていきます。それは主に4つの期間に分けられています。まず、日韓修好条規が発効した1876年と、第二次日韓協約によって大韓帝国が日本の保護国(植民地)になった1905年の間です。続いて、1905年と第二次世界大戦の始まりの1939年の間でした。その時期に韓国・朝鮮人は産業労働者としてよりよい生活を求めて大勢渡日しました。三つ目の時期は1939年から1945年まで、若しくはサンフランシスコ講和条約が発効した1952年までです。そして最後の時期は1950年代から現在までです。戦後に日本に残された在日韓国・朝鮮人の約70万人くらいは当時まで持っていた権利をすべて失いました。また、人権に関していえば、1991年に日本の政府はマイノリティを管理するために在日韓国・朝鮮人に対する特別な扱いを目的にした法律を規定し、それによって「特別永住者」というカテゴリが生じました。特別永住者というのは、日本人と同等に暮らせる一方、参政権のみは今までと変わらず与えられていない在日韓国・朝鮮人のことです。法務省のページによると去年の特別永住者数は34万8,626人に達しました。

最後に在日韓国・朝鮮人のアイデンティティの多様性について話したいと思えます。在日韓国・朝鮮人には4つの世代があります。1世代目は朝鮮生まれで、朝鮮半島への繋がりが強い人たちのことです。2世代目以降の在日韓国・朝鮮人は日本生まれで、大多数は日本の学校に通っていて、日本の社会の中で生きようとしています。自分が日本人なのか韓国・朝鮮人なのかに関しては、2世代目と3世代目はどちらでもないと思う人が殆どです。日本にいと

韓国語・朝鮮語が習得しにくい上、たいいていの人がいじめにまで遭っているのが、両国への繋がりは浅いです。これらの世代では、自分のルーツがどこにあるのかに関わらず、とにかく自分の人生で成功したい人が多いようです。そして4世代目は、日本生まれ日本育ちで、家族・親戚もみんな日本生まれなので、韓国語・朝鮮語が話せないし、自分のことも日本人だと思っている人が多いです。そういう人は、日本人と結婚することにも、帰化することにも全く抵抗を持っていません。しかし、自分のことを日本人だと思っても、エスニシティの視点から見ればルーツが朝鮮半島にあることには変わりありません。

現在、在日韓国・朝鮮人が通える学校は二種類あります。朝鮮学校と、一般的な日本の学校です。朝鮮学校に在学している人、又は在学していた人は、朝鮮語・韓国語が話せて、自分が朝鮮半島にルーツを持つ在日韓国・朝鮮人だとちゃんと自覚しています。それから、他の在日韓国・朝鮮人の知り合い・友達もいて、それらの人々との関係を作ることの重要性についてもちゃんと理解しています。つまり、自分が日本では外国人として生きているということを承知しています。一方、日本の学校の在学者、又はは在学していた人の中では、青年期まで自分のエスニシティが韓国人・朝鮮人であることを知らなかった人がかなり多いようです。また、もし自分が在日韓国・朝鮮人であることを幼いころから親に伝えられていたとしても、別に韓国語・朝鮮語が話せなくてもいい、韓国・朝鮮名を使用しなくてもいい、自分が韓国人・朝鮮人であることさえわかれば、それでいいと言われた人も多いそうです。ですから、彼らは一般的に自分のことを外国人だとは思っていません。しかし、本当のところでは、日本人ではなくて、外国人ですから、アイデンティティと帰属のズレに繋がります。

では、アイデンティティに関する心の葛藤はどうすれば解けるのでしょうか。その問題をめぐって議論した在日韓国・朝鮮人の兄妹がいます。兄の方は現在大学教員で、2004年に日本国籍を取得できました。

彼の考えでは、外国籍を維持している人が公務員の仕事などで拒否されることは排除でも差別でもありません。在日韓国・朝鮮人はもし日本人と同等に暮らしたい、参政権など取得したいと思っているのなら、帰化すればいいとのこと。そうすると問題が自動的に解決されると彼は主張しています。一方、妹の方は管理職試験に出願しましたが、外国籍を理由として拒否されました。それで彼女は、東京都を提訴して最高裁まで戦い続けましたが、結局敗訴となってしまいました。彼女は自分の国籍を維持しつつ、日本人と共に同等に生きたいと言っています。彼女の言葉を引用すれば、「ひとりひとりが違うことを大切にする社会」を作りたいそうです。

私の個人的な考えでは、日本人と在日韓国・朝鮮人の両側からの努力が必要だと思います。在日韓国・朝鮮人の中には帰化したい人もいれば、韓国・朝鮮籍を維持しながら日本の社会で日本人と同等に生きたい人もいます。皆それぞれの思考を持っているからこそ、それを尊重し、対応できる社会が必要だと思います。つまり、在日韓国・朝鮮人は、もし自分の国籍を保ちたいのなら、それなりの限界があるということを了承すべきだと思います(例えば、公務員になれないこと)。一方、日本の側からも、もう少し在日韓国・朝鮮人の人権を守る法律を作って欲しいです。でも、最良の解決方法はやはり二重国籍の認可だと思います。

読者の皆様は、この件についてどう思っていますでしょうか。

(チャン・ホン・ホア

エルテ大学日本学科)

境界から見た風景（2）

Pusztai Beáta

さて、前号では「境界の存在」の意味と分類について記し、今号では宮崎駿監督による『千と千尋の神隠し』（2001年）及び『ハウルの動く城』（2004年）における「境界の存在」の分析について記します。まず、前号でわかった4つの興味深い点に沿って見ていきたいと思ひます。

第一に、「境界の存在には色々な種類がある」ということです。両映画が境界の存在に満ちている事は明らかです。千尋は幼い子供で、ソフィーは十代の若い女性ですが、二人とも大人のマナーを知る為に、子供の日常から大人の世界に強制的に引きずり出されてしまいます。千尋が働く事によって礼儀と責任感を学ぶのと同様に、呪いをかけられておばあさんの体になったソフィーは、自分以上に誰かのことを思って、その誰かの為に行動するという経験をします。

しかし、千尋とソフィーには大きい違いがあります。千尋は自らの行為によって境界を越えますが、一方、ソフィーは解けない呪いのせいでそのトランスグレーション、境界破りを自分の体の中に持たなければならなくなります。その為、千尋と違って、ソフィーは永久に境界の存在のままで生き続ける運命なのです。同じく境界性を体内に持っているものには他にも、ハウルとソフィーに呪いをかけた荒地の魔女と、ハウルの心臓を持った火の悪魔カルシファーと、呪われてかかしになった王子カブがいます。具体的には、ハウルと荒地の魔女、そして湯婆婆は三人とも人間と動物の間の存在で、黒くて大きくて怖いカラスに化ける事が出来るキャラクターです（カラスには力と暴力と死のイメージが付いているからでしょうね）。

別の観点から見ると、両映画の中に子供と大人の間の状態であるキャラクターがかなりいます。千尋も坊も千尋の両親も、そしてソフィーもハウルも少年マルクルもカルシファーも荒地の魔女も、ある意味で大人を気取っているただの子供に過ぎないと考えられます。これは一体どういう意味なのでしょう。

第二に、「境界のキャラクターはファンタジーの登場人物だとは限らない」ということです。この二つの映画はファンタジーですが、設定や登場人物がファンタジーであっても、キャラクターの目的は世界の救済などではなく、意外と普通です。千尋もソフィーも頼もしい大人になって自分の家族を取り戻す事あるいは作る事を目指しています。両方とも、ある意味で「日常系アニメ」であるとも考えられます。なぜなら、ストーリーをあまり進展させず、ただ主人公の日常生活と家族や同僚との関係をゆっくりとしたペースで表すシーンがたくさんあるからです。境界の存在で溢れているアニメ世界の中でもこういった日常系ファンタジー作品はスタジオ・ジブリならではの名作であるとも言えます。

第三は、「境界の存在は必ずしも危険なモンスターではない」ということです。この二つの映画では、主人公は二人とも境界の存在であることを恨んで悩むより、先に進んで一刻も早く一人前になる

為に努力をする道を選びます。この前向きな態度のおかげで、自分自身にも社会にも危険をもたらさないので。しかも、実に人間味があるので、視聴者も感情移入せざるを得なくなります。

第四は、「境界の存在の多くは、何らかの社会問題に関する不安を表現している」ということです。映画の裏に描かれた社会問題を理解する為には、主人公達個人の変化と、キャラクターとキャラクターとの関係をもっと深く分析しなければなりません。

まず、両映画でテーマとされている最も重大な社会問題は、健全な個人と家族の構造と、その障害となっている父親・母親不在です。『千と千尋の神隠し』について言えば、主人公、千尋は親を取られてしまっているし、巨大な赤ん坊の姿をしている坊には母親の湯婆婆しかいないし、その湯婆婆も千尋の大人げない両親と同様に、あまり子供の成長に関わっていません（湯婆婆は商売に夢中で自分の息子に気づかないシーンが3回もあるし、同じく、坊にも湯婆婆とその双子の妹の区別がつきませんでした）。同様に、『ハウルの動く城』のソフィーとハウルも、両親不在です。しかも、ハウルだって、ハウルとマルクルとソフィーで構成されている自分の第二の家族においては、よく家を空ける父親に過ぎないとも考えられます。例えば、マルクルが「久しぶりだね～、ちゃんとした朝ごはんって」と叫んで燥いでいる朝食のシーンは、ハウルが戦争や仕事のせいで朝帰りするのは珍しくないことを強調しています。

それでは、これらの映画における父親・母親不在対策は何なのでしょう。

『千と千尋の神隠し』の場合、子供は健全なロールモデルがないまま成長していくしかないという結論に至ります。一方、『ハウルの動く城』の解決方法はハウルの父親としての進化と、家族の新しい母親役になるソフィーによる家庭作り活動です。つまり、自分たち自身が親というロールモデルになろうとしています。しかし、父としてのハウルと同様に、母としてのソフィーの中でも子供と親と老人の特徴が混ざっています。そして、この役割を全部同時に受け入れる可能性もあります。若い体に白髪を持ったソフィーの最終的な姿がまさに、その進行と退行との永久交替の可能性の象徴です。

もう一つの共通の社会問題は、父親の不在が子供の中にある母親に対する「甘えたい」という気持ちや母親の中にある「甘えさせたい」という気持ちを増幅させてしまい、

子供が母親に甘え過ぎているという状態です。ハウルとソフィーばあさんとの関係も、湯婆婆と坊との関係も、甘えを非常に利用する親子関係です。特に坊の場合、母親の「一人息子に子供のままでいてほしい」という気持ちに応じて、完全に部屋の中で引き込まれた状態です。ですが、ストーリーの作者は母親の目を盗むことのできる鼠へのメタモフォシス(変態)によって、坊にも成長の機会を与えてあげます。従って、境界性は必ずしも不自然で災難だと決まっている訳ではなく、人の成長の一段階であるということではないでしょうか。

しかしながら、二つの作品の間には、世界観と人間観に関して根本的な違いがあります。新しく転校することになっている学校に向かって舌を出すような生意気な千尋は、労働と接客と恋を味わって、お世話になった教育係りのリンに認められてからこそ、初めて礼儀正しい娘、そして両親の救済者として立ち上がることが出来ます。更に、全く変わろうとしない千尋の両親を除いて、2001年に制作された『千と千尋の神隠し』の登場人物はみんな前だけに進んで成長しようとしています。つまり、境界に触れる事が人の成長の為であれなんであれ、その境界性とは必ず一時的な状態だということです。そして、境界性は湯婆婆が管理する神や妖怪の為の温泉と同様に、まるで「異世界」での体験で、「人生の寄り道」にしか過ぎないということです。結果としては、主人公がその異世界から

離れなければならない、そこで得た知識だけを持ち帰ることとなります。言い換えれば、人生とは「一方通行」、片道だけの過程で、いつも変化イコール進行だということでしょう。

一方で、わずか3年後に制作された『ハウルの動く城』は前述の現実離れしているとも言える人間進化論に反対し、人の成長を一方通行でポジティブな過程ではなく、永遠に続く自分自身と他人との間のアイデンティティの交渉として描きます。これを通して、境界破りだけでなく、永久状態としての境界性も自然なこととなります。すなわち、人生とは進行だけの一方通行ではないということです。人の成長とは進行も退行も含め、「道」そのものだということです。

ソフィーとハウルが最初に出会った時、若いソフィーはハウルの魔法に助けられるばかりで、自分で自分を守ることも出来ませんでした。まるで子供であるかのように見えました。それに比べて、ハウルは乙

女を助ける金髪の王子様に見えました。また、城の中で会った時も、体がおばあさんになったソフィーより城の主人として指揮をとったハウルの方が大人という感じがします。しかし、その後、ソフィーばあさんは積極的に、大掃除や洗濯をし、マルクルのおばあさん代わりとなります。その後、ハウルは髪色が金髪から黒に戻っただけで大騒ぎをしたり、闇の聖霊を呼んだりしたため、王子様のイメージが崩れていき、このシーンのハウルは本当に思春期の少年みたいです。本当に一瞬でしたが、ソフィーばあさんもハウルの痼疾に絶望し、家を出て子供の様に大声で泣き出したことがあります。更に次のシーンのハウルは、お子様用の部屋でベッドの上で拗ねています。しかも、ソフィーを母親ということにして自分の代わりにハウルの師匠の元に戦争の件を断りに行ってくれるよう説得しました。ソフィーだって、従ってしまった時点で母親役を受け入れてしまったこととなります。これで、二人の役割は一時的に逆になりました。ただし、間も無くハウルはソフィーに甘え過ぎたことに気がつき、ソフィーを追いかけました。しばらく、ソフィーとハウルは対等の大人になりました。この二人だけではなく、マルクルも荒地の魔女も同様に子供と大人と老人との間の存在と言えます。

これを通して、最終的に魔女がおばあさんの、ソフィーが母親の、ハウルが父親の、そしてマルクルが息子の役割を受け入れました。とは言え、これからはもう誰も変わらない、つまり、大人はもう子供になったり大人に戻ったりしないとは限りません。つまり、この映画には、「人は完璧ではない、完璧にはなれない、そして完璧になれなくても大丈夫だ」という、『千と千尋の神隠し』よりも優しく響く、人を思う気持ちが含まれているとも考察出来ます。

日本のアニメーションにおける「境界の存在」について論じました。以上のことから、象徴としての「境界の存在」には数え切れないほどたくさんの種類と意味があり、「境界破り・境界性」とは想像以上に普通のこと、少なくとも一時的には全ての人々に当てはまる状況だという結論に至りました。

最後に、境界性のもう一つの意味を述べましょう。文化と文化、民族性と民族性の間に生きている人は「ハーフ」とよばれています。アニメで例えれば、『進撃の巨人』（荒木 哲郎監督、2013年）のミカサ・アッカーマンや、象徴的な意味で、『犬夜叉』シリーズの半人半妖である主人公の犬夜叉や、『ハウルの動く城』のハウルなどのキャラクターがハーフの代表だと考えられます。例えば、ハウルが生まれ付きの黒髪を青い瞳に合わせて金髪に脱色したのは、二つの文化・民族の中でどちらか一つだけを選び、その一つだけに属したかったからだだと論じることも出来ます。そう考えれば、ハウルは自分自身にも家族にも認められて初めて青い瞳と黒髪、つまり、二つ以上のカテゴリ・文化・民族を同時に持つことが出来たとも言えます。それによって、「境界」が「両方」に、「ハーフ」が「ダブル」になるのではないのでしょうか。このように、スタジオ・ジブリの作品は「本当の自分のままで生きることが出来る以上、永久に『境界の存在』のままでも良いではないか」という励ましのメッセージを届けてくれるように思ひます。

(プスタイ・ベアータ)



アベノミクス理論の崩壊 ―浜田宏一内閣参与の理論撤退

経済学と経済学者の傲慢

現実的な根拠のない政策展開を擁護するのは、真摯な理論的な姿勢からほど遠い、イデオロギー的な扇動である。アベノミクスを擁護する「経済学者」(アベノヨイシヨ)の多くは三文学者だが、浜田宏一氏は経済学の世界では国際的に名の知られた学者である。その浜田氏があまりに安倍内閣に肩入れするのを危惧した教え子たちが、浜田氏に政治への過剰な関与を諫めることができる学者(たとえば故青木昌彦氏)を探していたことを知っている。学者の晩節を汚してはいけないという思いからである。

社会科学のなかでも、経済学は現実経済を左右する政策に関係することから、特権的な位置にある。とくにアメリカでは経済学者の個別の理論が現実政策に採用されることがあり、経済学者が政府の政策に与える影響力は非常に大きい。こうした理由から、日本の経済学者はアメリカの経済学者の理論動向に目を配り、アメリカ政府が採用する経済政策を日本に持ち込むことに熱心だ。アメリカ政府の経済政策展開における経済学者の地位は日本のそれに比べてはるかに高く、それを知る日本の経済学者には忸怩たる思いがあった。とくにアメリカに留学した学者にその傾向が強い。ところが、「アベノミクス」で、漸く「経済学者」に陽の当たる出番がやってきた。競ってアベノヨイシヨをやって、日銀総裁や副総裁のポストを得るか、政府の顧問になろうとする流れができた。

しかし、経済学は自然科学に比べて、はるかにその科学性は低い。ほとんどの経済理論は複雑な経済現象を単純化して、経済の部分現象の一部を一般化するものだから、理論的結論が有効な経済政策提言へ結実することはない。この理論と政策の距離を無視し、単純化された理論的結論から現実の政策展開を行おうとすれば、イデ

オロギー的な政策主張に陥りやすい。アベノミクスはその典型である。しかし、政治家をヨイショする高慢ちきな経済「学者」が自らの誤りを認めることはない。理論的分析にもとづく政策がうまく作用しないのは、外的要因が作用しているからだと強弁するのが常である。

すべての経済理論は極めて限定された条件を前提している。逆に言えば、理論が前提していない現実要因は無数に存在する。だから、理論通りに政策が現実経済に作用しないのは当然なのである。アベノミクスを擁護する三文学者はアベノミクスがうまく機能しないのは、やれ消費増税があったから、やれ想定外の円高が進行したからと弁解するが、その程度の要因を前提しない理論や政策など、何の役にも立たないことを理解できないのだ。

理論的な誤りを認めた浜田宏一内閣参与

11月15日付けの「日本経済新聞」は浜田宏一内閣参与のインタビュー記事を掲載した。このインタビューの中で、浜田氏は、「私がかつて、『デフレは(通貨供給量の少なさに起因する)マネタリーな現象』だと主張していたのは事実で、学者として以前言ったこととは、考えが変わったことは、認めなければならない」と述べている。漸く、浜田氏は現代の先進経済国におけるデフレ現象を、実体経済に起因するもので、貨幣的な現象でないことを認めざるを得なくなったのである。とすれば、市中の通貨量を大量に増やす政策は、金融市場を活性化させても、実体経済に与える影響はほとんどない。だから、大仰に叫んできた政策目標である「インフレ目標」も達成できない。

誤りを認めるのなら早いほうが良いに決まっているが、すでにここ4年の金融緩和政策によって、日銀は膨大な国債を抱え込んでしまった。さらに、この政策展開過程の

中で、年金基金の資産運用政策が変更され、リスク資産である株式への投資割合が大幅に引き上げられた。それを主導したのは、同じく、リフレ論者の伊藤隆敏氏(現、イェール大学教授)である。

日銀の金融緩和政策と年金資産の株式投資は、今後の日本経済と社会に大きな負の影響を与え続けるだろう。しかし、政治家も学者も、誰もその責任を取ることができない。ここには「究極の無責任」が存在する。この間違った政策がもたらす負の遺産は、長期にわたって、日本の若い世代が背負って行かなければならない。いずれ歴史は、安倍内閣が遂行したアベノミクスが戦後最大の経済的災禍を与えたものとして記すことになるだろう。目先の利得や愛国心を煽る知性に欠ける宰相を支持した国民が、最終的に、政府と日銀が抱え込んだ負の遺産を引き受けなければならない。政治家を見る目をもたなかった日本国民の自業自得である。

懲りない「アベノヨイシヨ」の御仁たち

御大浜田氏が理論的な誤りを認めたことに、アベノヨイシヨの三文学者が右往左往している。「日経の記事で、浜田氏は金融緩和政策が誤りだったとは言っていない。日経の誤報だ」(高橋洋一)とか、「浜田氏に金融政策の誤りを認めさせたがる困った人たちがいる」(田中秀臣)などと、御大の理論的撤退を認めようとしらない人々がいる。頭の固い人々たちだ。現実を直視できないという意味でも、三流学者だ。

高橋洋一氏などは、「数学で経済がすべて理解できる」と主張している奇妙な御仁だ。数学で経済が理解できるなら、経済学は不要だろうに。自分の言っていることの意味すら理解できない人々が、アベノヨイシヨを形成している。もっとも、御大浜田氏も、「(政策の正しさは)理論的・数学的に証明されているんですよ」というのが口癖

だが。

一つ言っておけば、経済学の世界には、数学にたいする根深いコンプレックスが存在する。経済学が科学たり得ないのは、数学を利用しないからだと単純に考えている経済学者は多い。物理学のように数学を使えば科学的厳密性が保証されるから、経済現象を数式や数学的記述で分析できれば科学になると考える単純思考が、経済学の世界に蔓延している。

このような歪んだ経済学像が形成された背景には、20世紀を代表するハンガリー人数学者ノイマンの影響が大きい。1930年代の初めに経済学の市場均衡問題に興味を抱いたノイマンは、経済学で使用されている数学が初等数学のレベルで、経済学者は現代数学に無知であることを辛辣に批判した。1930年代から1940年代にかけて、ノイマンは市場均衡解の存在証明やゲーム理論の構築で現代数学的手法の有効性を示したが、当時の経済学者はノイマンの論文や著書を理解できなかった。ノイマンの論文や著書が解説され始めたのは第二次世界大戦後で、主として数学から経済学へ転身した学者がこの研究を始めた。日本では二階堂副包や宇沢弘文などの数学出身の学者の仕事がそれにあたる。ノイマン論文を解説し、ノイマンが設定した問題に数学的な別証明を与えることが戦後数理経済学の流行になった。その結果、純粋数学で大成できなかった数学者が経済数学分野に多数参入してきて、経済学の応用数学化が進行してきた。

ところが、戦後の数理経済学者は第一級の数学者ノイマンを煙たがり、現代数理経済学がノイマンから始まったことを隠そうと躍起になってきた。その試みが奏功して、ノイマンが「トリヴィアル(つまらない)」と批判したナッシュのゲーム理論の応用分析を、現代数理経済学の出発点だと信じている若い数理経済学者は多い。現代数理経済学の「ノイマン隠し」には理由がある。ノイマンにとって経済モデルの構築は理論的余興の一つにすぎず、数学者が一生かけるに値するものとは考えていなかったからである。現代数理経済学がノイマンから

始まったことを認めれば、天才数学者ノイマン1人が始めたことを何千人何万人の凡才数学者が後追いしていることを認めることになるからだ。

経済学の応用数学化は今も続いている。だから、ここ四半世紀のノーベル経済学賞受賞理論は、部分的経済現象の応用数学的理論証明をおこなっているものばかりで、経済社会の複雑性を分析した記述的理論は受賞対象になっていない。自然科学分野や医学生理学分野のノーベル賞と違い、ノーベル経済学賞受賞の経済理論が現実問題を解決する道筋を教えることはない。

しかし、こうした経済学の応用数学化現象が、数理経済学者の理論にたいする誤った理解と傲慢を醸成している。浜田氏も、ことある度に、「金融緩和政策は理論的・数学的に証明されている」と自信満々に主張していた。自らが展開する理論モデルが現実経済とかけ離れたものであることを理解するのが、いかに難しいかを教えている。

補遺: 青木昌彦追悼

国際的に名が知られている日本の数理経済学者は指折り数えられるほど少数である。優れた数理経済学者は自らが展開する理論と政策との間に、大きな乖離が存在することを認識しているから、自らの理論的結論を単純に経済政策に展開できるとは考えない。ところが、中途半端な数学を使うマクロ経済学理論を専攻する経済学者は、深い思慮なしに、理論的結論から政策を展開できると考える。きわめて単細胞的である。そこが優れた経済学者と凡才の経済学者の分かれ目である。

数学出身の二階堂氏や宇沢氏の後、数理経済学の世界で名を知られた日本人経済学者は、雨宮健氏と青木昌彦氏(共にスタンフォード大学)である。雨宮健氏は国際基督教大学(ICU)出身で、スタンフォード大学助手の時代に、1セメスターだけICUで講義されたことがある。1969年秋、筆者はその講義(市場均衡解の存在証明)を受講した。

他方、青木昌彦氏は60年安保の主流派

全学連の論客で、姫岡玲治のペンネームで論陣を張った人物として知られている。東大大学院で玉野井芳郎教授のセミナーに入り、その後、ミネソタ大学大学院を修了して、スタンフォード大学で職を得た。ノイマンが編み出した分析手法はたんにゲーム理論や均衡分析のみならず、線型等式体系あるいは不等式体系で経済制度を叙述する方向へ応用された。2007年にノーベル経済学賞を受賞したハーヴィッツの業績はこの分析手法を評価されたものだが、青木氏の処女作『組織と計画の経済理論』(岩波書店、1971年、第14回日経・経済図書文化賞受賞)は、この分析手法を社会主義経済計画化の制度分析に適用したものであった。当時大学院生だった筆者がその書評に挑んだ懐かしい作品である。

ハンガリーの経済学者コルナイが1972年にノーベル賞受賞経済学者ケネス・アローの招聘でスタンフォード大学に留学した折、青木氏の隣に研究室を得たことから、コルナイと青木氏の親交が始まった。ともに、制度学派的な分析を特徴としていたから、相互に学び合うことができたのだろう。コルナイが国際経済学連合(IEA)会長を終えた後、青木氏が2008年から2011年まで会長を務めた。

筆者は1981年、法政大学社会学部創設35周年記念行事にハンガリーからコルナイを招聘し、講演とセミナーを組織した。宇沢氏には「不足の経済学」をめぐるセミナーの議長を担当してもらい、青木氏には京都大学でコルナイの講演会を開いてもらった。また、『コルナイ・ヤーノシュ自伝』(日本評論社、2006年)の発刊時には、日本経済新聞に長文の書評論文を出してもらった。その後、青木氏はブダペストにコルナイを訪ねられたが、筆者が会う機会はなかった。日本に戻られた後に、短期間ブダペストを訪問したこと、また次回のブダペスト訪問で是非会いたい旨のメールを受け取ったが、その約束が果たされることなく、2015年夏にお亡くなりになった。

(もりた・つねお)

お知らせ

2017年7月14日～30日 FINA国際水泳連盟主催の世界選手権が、ブダペストとバラトン湖で開催されます。種目別の開催地は以下の通りです。



1. 競泳・飛び込み種目：新設のDagaly Uszoarena (Dagaly通りに新設される競泳プール)
2. 水球：マルギット島、ハヨーシュ・アルフレード国民プール
3. バラトン湖 (バラトンフコレド)：オープン・ウォーター競技
4. スィンクロナイズト・スイミング：ヴァーロシュリゲット公園 (特設プール)
5. バッチャーニ広場 (ドナウ河沿い) に仮設される33mの塔：ダイビング競技 (男子27m、女子20m)

なお、新設のDagaly Swimming Arenalは常設6000席、仮設6000席の観客席が用意されます。各競技のチケット販売は12月1日から開始され、インターネットで購入できます。高いもので1500Fです。以下がそのサイトです。

<http://www.eventim.hu/en/tickets/17th-fina-world-championships-budapest-budapest-balatonfuered-167/events.html?>

なお、FINAの年次総会で、本年度の男子・女子の年間最優秀選手が表彰され、男子はアメリカのフェルプス、女子はハンガリーのホッサー・カティンカが受賞しました。つい先日、ホッサーはハンガリー水泳連盟会長のジャルフアシの辞任を求める公開書簡をだし、有力選手が同調し、政府も暗に辞任を促したために、世界選手権を前にハンガリー水泳連盟の幹部の刷新が行われます。

また、12月6日～11日に開催された短水路世界選手権 (カナダ) で、ホッサーは13種目に登録し、12種目に出場し (1種目欠場)、そのすべての種目で決勝に進み、金メダル7個、銀メダル2個を獲得し、短水路世界選手権で男女を通して、歴代最多の金メダルとメダル総数を記録した。Iron Ladyとも呼ばれるホッサーは、ハンガリーの競泳界を牽引している。水泳連盟の刷新を求めるホッサーは、実績を積み重ねているアメリカ人コーチで夫のシェーン・トウスツプをヘッドコーチに据えるべきだと主張しているのかも知れない。



各種音楽・芸術文化・国際交流イベント企画製作を中心とした業務の運営。ハンガリーを拠点にグローバルな企画・マネージメント展開を行っています。お気軽に、御相談下さい。

【主な業務内容】

- ・音楽企画・マネージメント業務
- ・ヨーロッパ各国のコンサート / オペラ / バレエ / オペレッタ / 舞踊 / 各劇場公演
- ・音楽講習会 / プライベートレッスン / 音楽研修企画
- ・国際交流事業サポート
- ・若手音楽家の推進育成サポート
- ・東欧・ハンガリー留学サポート・現地コーディネート
- ・短・長期賃貸物件仲介業務 (ブダペスト市内を中心とした、ハンガリー国内)
- ・各種通訳・翻訳サポート (ハンガリー語、英語、ドイツ語、日本語)
- ・購入・レンタルピアノ
- ・輸入・輸出楽器
- ・各種現地サポート (主にハンガリー、東欧、ヨーロッパ各国)
- ・文化・芸術関係テレビ取材・撮影・リサーチ・コーディネート等
- ・ハンガリー発日本語情報誌『パブリカ通信』発行
- ・その他、音楽制作に関わる一切の業務

Propart Hungary Bt.
Tel: +36-1-786-7846 / Mobil: +36-70-3815548
e-mail: proparthungary@upcmail.hu
proparthungary@gmail.com
web: <http://propart.client.jp/>



CI、広告、ロゴ、ホームページ等
名刺1枚からご希望の言語にて
デザイン致します。

各種パッケージ、インテリアのデザイン、
内装工事、翻訳から印刷まで
幅広く受け承っております。
お気軽にお問い合わせ下さい。

SAKURA DESIGN: info@innerdesign.hu
Inner Design Group - 1021 Budapest, Bognár utca 7.
Mobile: 06 20 480 4431

www.innerdesign.hu

留学生自己紹介

伝えることの大切さ

リスト音楽院ピアノ科短期留学生
加藤 麻里

8月より始まったハンガリーへの滞在も早いもので残り3日となり、今家の片付けをしたり、お世話になった方への挨拶をしながら、ハンガリーでの生活を回想しています。

私の滞在は半年と、おそらくハンガリーに留学される人のなかで最も短いと思いますが、短いながらもリスト音楽院の柔軟な教育体制に支えられて、充実した半年にすることが出来たと思っています。充実した生活が送られたのも、滞在中ずっと大切にしていた「まずは伝えること、やってみること」という意識による部分が大きかったのではないかと考えています。それはハンガリー生活での最初の一步までをすべてお世話して下さった、エージェントの女性から頂いたものでした。

こちらでは、個人の意志が日本で生活している以上に尊重されます。それには、伝え方の工夫も必要ですが、レッスンを聴講したい、あなたのレッス

ンを受けたい、こんなコンサートがしたいという自分の意志をはっきりと伝えたとき、驚くべき反応の大きさに返ってくるのです。その場で叶うことが出来なかったとしても、新たなチャンスをくれたり、他の先生を紹介してくれたり、何かが進むのです。私はそんな活発なコミュニケーションが楽しくなり、ハンガリーでの全ての一瞬が大事なものと思えました。ある日、練習室に次のレッスンのために入ってみえたチェロの先生と、しばらく日本での話が弾むうちにレッスンを聴講させてもらえることになり、レッスンにいらした憧れのコレペティトゥアの先生に後日レッスンを受けることが出来ました。ま

たある日はマスタークラスで素晴らしい演奏を聞き、自分とは正反対の解釈をしていた学生に感銘を受けた旨を伝えたら、お互いに弾きあおうと誘ってくれました。私が選択したパートタイムコースは、レッスン受講生ではありますが、レッスン以外にも大学内は様々なチャンスを秘めていることを再確認しました。



それはレッスン中での一瞬の中にもあります。私にレッスンを施して下さいました。私には、decision (決断) することを常に求められました。自分はやりたい音楽はあっても全ての音色まで今まで決断出来ていたのか、本番中にミスをおそれたときに、それは音楽から意識が離れた瞬間なのではないか。もっと自分の気持ちに正直に敏感になろう、練習からも本番の緊張感を見出そうと考えるようになり、朝から大学に練習に行き、疲れたら録音を聞きながら楽譜を見て勉強し、レッスンには本番のつもりで臨み、がむしゃらに毎日生活していくうちに、決断して音を出

すということがどういうことなのか、何ヶ月か経った今少しづつわかってきた気がします。

私はハンガリー人作曲家であるコダーイやバルトークの作品がとても好きで、留学がもし叶うならばハンガリーに行きたい、音楽に描かれる風景は、それはどんなものなのかとずっと興味がありました。実際に見

たハンガリーの街の美しさには、息を呑みました。百年を超える歴史を秘めた建物、澄んだ空気、そしてハンガリー語のリズム感。全てが新鮮で、いつも練習後に散歩をするのが楽しみでした。今取り組んでいるバルトークのピアノ協奏曲第3番は、ハンガリーの風景を詳細に映し出していて、これから帰っても、日本からハンガリーを懐かしむことが出来そうです。特に第2楽章のバルトークが公園を歩きながら鳥の鳴き声を聴くシーンは、実際に演奏会で聴けたときには、頭に浮かぶ家の近くの落葉がきれいな公園の風景も相まって、ハンガリーにいられて本当に良かったと涙しました。

留学は慣れた頃に帰らなければならないとは、本当にこのことだと思います。しかし、この

湧き上がってきた自分の課題と成果を、これからの日本の音楽生活でまずは一生懸命アウトプットしていくのもまた良いのかなと考えています。

留学中はたくさんの方に支えられて、本当に感謝してもきれません。そして初めて一人になって自分と向き合っ、改めて今まで多くの方に助けて頂いて今の自分があるのだと強く感じました。これからの人生では、それによって得ることが出来た多くの経験を、伝えていけたら私は思っています。

(かとう・まり)

留学生自己紹介

念願だったブダペスト留学

カーロリ大学

浜野 允実

「なんでハンガリーに留学？」飽きるほど聞かれた質問だ。でも、そりゃそうだと思う。名前もよく聞かないヨーロッパの国だ。ハンガリーに初めて来たのは2年前のこと。私は当時ドイツに留学をしていた。ハンガリーを旅行先に選んだのは、東欧でちがう景色を味わいたかったのと、なんか名前がヨーロッパっぽくないから、というバカっぽい理由。何か特別なことがしたいとかいう明確な理由があったわけではない。しかし、計画倒れにするのは最悪なので、思いついたその日に、行きの飛行機だけとりあえず予約して、とりあえず自分を、「行かなければいけない」状況に追い込んだ。旅行前の下準備などもほぼせず、その2週間後、ブダペストへ行った。

そしていざ来てみると、ドイツとの雰囲気の違い、物価の安さにとても驚いた。飛行機でたったの2時間移動するだけでこんなにも変わるのかと。それに加えて、人は優しいし景色もきれいだして、私はすっかりブダペストが好きになってしまっていた。さらに、当時カーロリ大学に留学していた友人に案内してもらい、大学の日本学科の授業にも参加させてもらったのだが、あんなに大勢の外国人が、べらべらと日本語を喋っているという光景が衝撃的だった。ひょいひょ

いと授業に突然やってきた見ず知らずの私に、みんなすごく優しくしてくれて、たくさん話しかけてくれて、「あ、私もここで留学してみたいかも」。そんな風に思った。ちやほやされて嬉しかった。そしてブダ城から見下ろす夜景を見たとき、「あ、私いつか絶対ここに住むわ」。そんな風に思った。言葉で表現するのは難しいのだが、ただ、「綺麗なな」で終わる感情ではなかったと思う。一目惚れのような感じだった。この時から、私の中のどこかで、ブダペストは特別な街になった。ドイツ留学中に他にもたくさんの国を旅行したが、やっぱりブダペストがいちばんだった。

ドイツでの留学が終わり、日本へ帰国した後も、ブダペストへまた行きたいという気持ちは無くならなかった。そして私は現在大学4年で、念願かなって半年間の交換留学生としてカーロリ大学に留学している。このセメスターが終われば大学を卒業し、来春から働く就職先もすでに決まっている。人生の夏休みともいわれる大学生活の、最後の最後のセメスターで、わたしはいま、ブダペストにいる。なんでハンガリーに留学？その質問の答えは、「日本学科の人たちにちやほやされたのが嬉しくて、ブダペストの夜景に恋に落ちてしまったから」。ほんとに自分でもバカで単純だと思うが、これがハンガリー留学を選んだ理由なのだ。

「じゃあハンガリーで何を勉強してるの？」

その次に必ず聞かれる質問がこれ。正確に答えるのならば、ハンガリー語の授業を週2回、それから、日本学科の授業にもちよるちよと参加している。だが実際のところは、大学の授業よりも就職先の会社に課されている資格試験の勉強と、卒業論文に充てている時間の方が多い。このように答えると、ある人に、「それって意味あるの？」と言われたことがある。

私はこの質問にうまく答えられなかった。だって、ハンガリー語の授業はたった週に2回だけだし、英語の授業を取っているわけでもないし、日本でもできる勉強をハンガリーで黙々とやるという留学は、果たして意味があるものなのか。わからなかった。ただ漠然とした理由で2度目の留学を選んだ自分自身のせいだった。そしてこの時がちょうど、留学がはじめて1か月ぐらいのことだったと思う。5人部屋の寮にイビキがとてつもなくうるさい女の子が引っ越してきたり、隣の部屋のアフリカ人が夜中に爆音で音楽を流していたり、シャワーのお湯が出ない日があったり、暖房がつかないのにエアコンのリモコンが無かったり。言い出したらきりが無いほど、「ハンガリー、なんなの!？」と思うことがあった。2年前初めてブダペストに来たときは、綺麗なところしか知らなかったけど、なんだか想像してたものとは違った気がして、期待していたものが大きすぎて、私はこの時結構へこんでいた。2回目の留

留学生自己紹介

学だから、きっと大体のことは大丈夫でしょ、と余裕をかましていたけど、違った。バカで適当な考えが、この自分の性格が、自分自身を悩ませた。まわりから見れば、とてもお気楽な毎日だと思う。自分でも、とっても贅沢な時間の過ごし方をしていると思う。でもこんなに悩む。だからこんなに悩むのかもしれない。

でも、ひとつ言えることがある。それは、ここでは日本ではできないようなキラキラした気持ちになれる瞬間があることだ。日本学科の友人と話していると、ハッとさせられる時がよくある。彼女たちは時々、わたしよりも日本のことをよく知っていて、わたしよりも日本が大好きだ。そんな人たちに日々囲まれていると、私も嬉しくなるし、もっと日本のことを勉強しなきゃと思うし、たくさ

ん日本のことを教えてあげたいと思う。毎日新しい発見があって、全然退屈しないのだ。きっと留学って、英語を身につけるためとか、医者になるためとか音楽を学ぶためとか、そういうものなのだと思う。それに比べたら、だれかに評価をつけられるのならば、私の留学はとても薄っぺらいものだと思う。でも、わたしはそれでも100%の自信を持って、この留学をしてよかったと思うし、タイムスリップして過去に戻れたとしても、絶対にブダペストに留学することを選ぶ。綺麗なだけじゃない、汚れた嫌な部分を知っても、やっぱりブダペストが嫌いになれない。それは、夜景が綺麗だからでもなく、物価が安いからでもなく、素敵なお人たちに会えることができたからなのかもしれない。私も負けてられない! そう思わせてくれる人に囲ま

れて生活できるというのは、なかなか当たり前のことではないと思う。日本へ行くという夢に向かって頑張る人、それを全力で応援している先生方、みんな、わたしにはキラキラ輝いて見えるのだ。

じゃあわたしはどうしようかな。何が出来るかな。最近ずっと考えているけれど、いまいわからない。「日本とハンガリーの架け橋になる!」なんてことを言える能力も勇気もないけれど、これからも、ハンガリーと、日本が大好きな人たちを応援していきたいと思う。

(はまの・まさみ カーロリ大学)



編集部よりのお知らせ



「ドナウの四季」のHPが完成しました。これまで掲載されたすべての原稿を読むことができます。

<http://www.danube4seasons.com>

皆様の原稿をお待ちしています。エッセイ、ハンガリー履歴書、自己紹介、サークル紹介などの記事をお寄せください。提出いただいた原稿は、紙面統一の編集のために修正することがあります。修正した原稿は執筆者の校正をお願いしています。

原稿は電子ファイルで、morita.magyar@gmail.comへお送りください。Word文書あるいは一太郎文書でお願いします。EXCEL形式での提出はお控えください。写真および図形は別ファイルで送付ください。

昔からNomadという言葉が好きだった。足しげく通った服屋の名前もNomadだった。気に入った服が売っているわけではなかったのだが、繁華街から少し離れたところに、こじんまりたらずむ店の雰囲気とNomadという店の名前が好きだった。

Nomadという雑誌も好きだった。毎月、どこか知らない外国の写真が一枚表紙を飾り、そこにNomadとだけ、雑誌の名前が黒字で書かれている。

Nomad…、それは、「遊牧民」という意味を持つ言葉だ。定住地をもち、あちこちを旅して生活するNomadの生活に、憧れがあった。

私が、初めて教職についたのは、兵庫県の小さな町だった。学校は市内に8校しかなく、教員も全員が顔見知りだった。みな自分たちの町の教育観を信じて日々子どもたちに向き合っていた。厳しくもあたたかいまなざしで子どもを育てるこの町の教育が好きだったし、「この町の教育を引っ張る教師になってね。」と、恩師に言われたときは、心の底からそうなりたかった。

ただ、「この町の教育こそが、素晴らしい。」と信じて、36年間教師を続けていくことには、一抹の不安があった。本当に、「素晴らしい。」とりたいなら、外から自分の町を眺めてみる必要があると思った。3年間の初任期間を終えた私は、私の町の教員から「最も嫌われている」市外の小学校へ転勤した。

大好きな人たちにとっても嫌われている学校での3年間は、朝から晩までひらすら研究に没頭する日々だった。感情ではなく理論であり、気持ちではなく理屈で子どもと向き合う日々が続いた。何をすることも、「なぜ?」「根拠は?」と聞かれ、いちいち説明するのが大変だった。「だから嫌われるんだ。」と心底思った。そんな学校の研究テーマは「グローバル人材の育成」だった。加速度的に進むグローバル社会を生きていくために必要な「能力と資質」を明らかにし、それを育てて見せるというのが、この学校のポリシーだった。想定される「未来」から逆算し、「今」の学校教育を展開しようとする「嫌われ者の言い分」が、いつのまにか大好きになっていた。

ただ、学校が考える「グローバル人としての能力・資質」を信じて、その先の33年間教師を続けることには、やはり不安があった。国内にいてどれだけ「グローバル」を語るができるのだろう。実際にグローバルな場所で生きている人々に出会い確かめてみなければ、「言い分」は真実味を持たないと思った。そこで決意したのが、日本人学校教員としての勤務だった。

派遣が決まった時、恩師Aには、「いつになったら帰ってくるんや!」と怒られた。恩師Bには、「あなたこのままじゃ根無し草よ。」とあきれられた。いつのまにかNomad化している自分がおかしく、恩師の言葉も馬の耳に念仏であった。

さて、日本人学校でのこの3年間は、私の教員生活の中で、もっとも充実した日々となった。日本人学校の子どもたちは、みな素晴らしい資質を持っている。特に素晴らしいのは、様々な価値観を受容する心を持っているということだ。その証拠に、子どもたちは人の話をよく聞く。特に、道徳や総合学習といった答えのない学習では、友達の意見にじっくりと耳を傾ける。時には、真っ向から対立する考えが出る時もあるが、衝突は起きない。それぞれに「大切にしていること」が何か、発言の裏にある思いを探ろうとする。総合や道徳に限ったことではない。算数のように答えが一つの学習でも、解き方が複数あることを子どもたちは知っている。どの解き方が最も効率的か、あるいは自分にぴったりなのか、異なる解き方の中にその価値を見出そうとする。そんな日本人学校の子どもと過ごす日々の中で、私は「Global Nomad」という言葉に出会った。

「Global Nomad」という言葉は、月間海外子女教育という雑誌で紹介されていた。直訳すると、「世界的な遊牧民」だ。「Global Nomad」は、生まれた国を子どもの時に離れ、外国で育った後、再び自分の国、あるいは別の国に移動して生きる人々のことを指して使う。確かに世界を股にかけて旅する遊牧民のようだ。素敵な言葉だと思った。彼らを対象に、大変ユニークなアンケートが採られていたので、印象に残った質問を三つ紹介したい。先に二つ紹介する。

Q1.「好きな国を選んで」と言われても答えられない。 Yes-40 No-3

Q2.行動や信念において、孤立することを恐れない。 Yes-42 No-1

質問の一つ目に多数のYesが寄せられるのは、どの国からも学ぶべきことがあり、影響を受けて育っているため、どれか一つを選ぶというのは難しいのだという。二つ目の質問は、国が変われば、社会的規範も変わる。国を渡り歩く生活をするならば、規範は社会の中にはなく自分自身の中に見出す必要性を感じるからだそうだ。日本人学校の子どもたちを見てみると、置かれた環境においても、物事の考え方においても、まさに「Global Nomad」と言えると、この記事を読みながら感じた。私が知りたかった答えの一つたどり着いたような気がした。

最後に紹介する三つめの質問は、私にとっても特別である。

Q3.あなたにとって「ふるさと」とはどこでもなく、どこでもある。 Yes-40 No-3

小さな町の教育観の正しさを証明するために始めた私自身の「遊牧」も、今では、それぞれの場所から学ぶべきところがあり、それぞれの場所の正しさがあると感じる旅に変わった。教師としての私の「ふるさと」もまた、三つの学校のどこでもなく、どこでもある。

homeはなくとも、大切にしたい場所や人はどこにでもある。定住できない自分を根無し草だと笑わずに、これからもNomadな生活を続けていきたい。

(あまり・のりひろ 日本人学校教諭)



平成29年度 ブダペスト日本人学校 新入生(編入生)学校説明会案内

平成29年1月28日(土)
10:00~11:20(受付9:30~)

ブダペスト日本人学校 2階ホール及び小学部1年教室・中学部1年教室
住所: 1125 Budapest Virányos út 48 電話: +36 1 392 0360

説明会参加ご希望の方は、予めご連絡ください。
詳細は、本校ホームページをご覧ください。 www.bpjpschool.hu

問い合わせ先: ブダペスト日本人学校
担当: 太田晋輔 メールアドレス: ota@bpjpschool.hu



みどりの丘補習校



6カ月を振り返って

野村 智子

今年の6月、東京からブダペストに夫の赴任に伴い家族で越してきた。海外は3か国目だ。10年前、チェコの首都プラハで初めての外国暮らしを始めた時はワクワクした。若者に交じって語学学校で学ぶのは新鮮だったし、長男を保育園に預けかつての仕事のコネを使い、週三回のアルバイトを始めた時は、自分もプラハの一部になれた気がした。その後長女が生まれ、長男同様保育園に通い、二人とも順調にチェコ語を話し始めたことがとても嬉しかった。そんな充実した生活を4年半送った後、ロシアの首都モスクワで2年半暮らした。チェコ語とロシア語は同じスラブ語属。ロシア語のキリル文字は独特だけど、音の7割がほぼ同じと言われていたせいか、長男は数カ月でロシア語を話し始め私達をびっくりさせた。

順調にと思われたロシアでの暮らしだったが、長男が地元小学校に通い始めたたん、日本語とロシア語の学習の両立の悩みが始まった。ひらがなやカタカナだって簡単ではないのに、日本では小学1年生で80字、2年生では160字も漢字を習得しなければならぬ。更にロシアの学校ではキリル文字を読みこなす、プーシキンの詩を暗唱しなくてはならない。ハンガリーでも詩の暗唱は定番だけど、いきなりプーシキンハードルが高い。Google翻訳を使っていてもチンプンカンプンだ。補習校のないモスクワでは子供達の日本語学習は私一人の手に委ねられており頼るところもない。このままでは日本語もロシア語も中途半端になるという焦りから、私は夫に日本帰任を懇願するようになっていった。

平穏だった3年の東京暮らしを経て再びやってきたヨーロッパ暮らし。プラハ時代に遊びに来たブダペストのイメージはプラハに似ている。川を挟んで町が発展しており、対岸から見上げる王宮の景色にはデジャブ感さえあった。使いやすいトラムやメトロの感覚も同じ。まるで帰ってきたみたい。小学6年生と2年生になった子供達は前より手がかからなくなっているし、現地の人たちがこぞって彼らのチェコ語、ロシア語の流暢さを褒めてくれたのだから、ハンガリー語もほとんど話せるようになるだろう。すんなり新しい暮らしが始まるはず、、、などという甘い期待はもちろぬ幻想だというのがすぐにわかったのだが。

私達が選んだ学校はサポー・マグダというハンガリーで最も著名と言われる作家の名を冠したバイリンガルスクール。授業は課目によってハンガリー語と英語で行われるため、2か国語一挙両得を狙ったちょっと欲張りな選択だ。インターナショナルスクールと違って生徒の多くはハンガリー人だが、ハンガリー語を母国語としない生徒のためにインターナショナルクラスなるものを設け

ており、例えばハンガリーの歴史の授業のようにハンガリー語を理解できない生徒にとってはハードルの高すぎる授業の際は、別途インターナショナルクラスに参加し、一からハンガリー語を教えてくれるというありがたいシステムを持つ。しかも6月半ばから8月末までの長い夏休み中、二人の子供のために個人レッスンを提供してくれたのだ。これによって基本的な単語やセンテンスを学び、9月からの新学期を多少なりともスムーズに迎えられるはずだった。

夏休み中子供達はよく頑張ったし、私も先生方と一緒に頑張ってよくサポートしたと思う。しかし語学の習得というのは一朝一夕に成せるものではなく、空気の抜けた浮き輪程度しか持たず広い海に放り込まれた子供達は、どちらに向かって泳げばいいのかさえ分からぬまままよい続ける日々が始まった。しかし、状況的にはほぼ同じであるにもかかわらず、長男と長女の様子はまるで違っていた。優等生タイプの長女は、完璧どころか手掛かりさえつかめず周りで起きていることが全く分からない中で自信を無くし内にこもりがちになったのに対し、マイペースであり良くも悪くも独自の価値観をもつ長男は、新しい環境を受け入れ、わからないながらも日々を楽しんでいるようだった。長男は多少英語が理解できたことも幸いしたのだろう。

頑張り屋の長女はそれでも弱音を吐かず登校していたが、1週間が過ぎたときもう学校に行きたくないと言って大粒の涙をぼろぼろ流して訴えたことがあった。彼女の気持ちは痛いほどわかる。こっちまで泣き出しそう。先生もクラスメイトも心配して泣いている長女に声をかけてくれた。結局、私は何も言えず黙って背中を撫でていただけだったけど、ひとしきり泣いた後自分から教室に戻っていった。しっかり私を見て、もう帰っていいよと言って。その時何かが、ほんの少しだけ何かが変わったんだろう。あの日から3カ月経ち、ハンガリー語も英語もまだまだではあるけど確実に上達してきている。試行錯誤しながらやってきたことも少しずつ成果が出てきたのかもしれない。ただ、日本人の内気さからか学校であまり話していないようだ。語学堪能なヨーロッパ人からすれば3カ月もたつのになぜ彼らは話せないんだ?となるみただけで、彼らのゆっくりではあるけど確かなあゆみを知っている私はもう少し待ってとお願いしている。そう、私達日本人はゆっくりとしか話せるようにならない。あなたたちと違って語学習得に適した



補習校バザー

深町 やすこ

DNAを発達させる機会が少なかったのだ。

そんな彼らにとって、週末の補習校は大のお楽しみの時間。仲良しになったクラスメイトと日本語でいっぱいおしゃべりできる。日本語に関しては(今のところ)誰よりもうまい自負がある。大変だったあの時期を乗り越えられて今があるのは補習校の仲間の助けがあったおかげであることは間違いないと思う。そして今回の学習発表会。土曜日だけの日本語授業であれだけ立派な発表ができるなんて!学年を追うごとに内容も充実し日本語や古典への理解や親しみも増していた。彼等は皆平日ハンガリーの学校で

の授業もきちんとこなしながら週末の日本語学習も怠らなげんがっている。先生方やご家族のサポートも欠かせないことは間違いなく、本人の努力と整った環境がなければ達成しえない難易度の高い試みが成功しているのだ。大変だけれど価値のある、きらきら光る宝物だ。頑張る補習校の子供達の姿を見て、この6カ月の大変さが報われた気がした。大丈夫だよ、大きな進歩は実感できないかもしれないけど、続けていくことで確実に成長しているんだよ。お母さん達にはそれがわかるよ。明日もまた、頑張ろう!!

(のむら・ともこ)

みどりの丘日本語補習校にて、11月26日土曜日に、毎年恒例のバザーが開催されました。このバザーは、1年間の補習校の行事の中で、保護者にとって、とても大きな行事になります。

11月の最初の土曜日から、提供品の回収が始まります。その日から、保護者により、仕分け、値札付け等の準備がされていきます。この準備では、バザーを長年経験してきた保護者の的確なアドバイスが助けとなり、作業を進めてく中で、とても役に立ちます。私は、今年で2度目の参加となりました。去年は、補習校に入ってから日が浅く何もかも分からない緊張状態でのお手伝いで、色々教えて頂きました。今年は自ら進んで準備する事ができ、初めてバザーに参加する保護者にアドバイスができる自分をみて、この様にして補習校のバザーが引き継がれていく事を実感しました。そして、毎週集められる沢山の提供品にはとても驚くものがあり、ありがたいと感じました。

また、この期間では、クラフトブースに出品するアイデアなども

話し合わせ、1つでも多くの和的要素のあるクラフトを販売する為に保護者達が試行錯誤している姿と、素晴らしいアイデアにとっても感心するばかりでした。3週間に渡る大変な準備になるのですが、作業を通して保護者同士で相談しながら、楽しく準備していく事が出来たと思います。

バザー当日、温かく、足を運びやすい天気にも恵まれました。まず、会場の設置から始まります。ここでも、経験者のアドバイスの元、ちゃくちゃくとテーブルが配置されていきます。テーブル配置後は、各ブース担当者による沢山の商品の陳列もすばやく、レイアウトも考えながら行われていく姿は、本当にすばらしいものです。クラフトブースにも、沢山の和風な物、クリスマスギフトとして喜ばれる素敵な物が沢山並べられました。

そして、このバザーでは、保護者だけではなく、補習校の子供達による出店ブースも設けており、自分達が使っていた物などや、前日、そして朝早くから自分達で準備したお菓子などを出品するため、子供達による会場準備も、保護者に負けじと念入りに行う熱心な姿をみかける事ができました。





みどりの丘補習校



私は、バザー係りと食品ブースを担当しました。去年に引き続きパンダ型おにぎり、そして、今年は新たにねこ型おにぎりなどを販売しました。このパンダやねこ型おにぎりは、子供達にとっても好評を頂き、「かわいいから食べられない」と言っていた事を聞きました。その他にお菓子では、人気が高い抹茶クッキー、ケーキ、マフィン、トナカイと雪だるまのデコレーションがされたカップケーキが販売されました。このデコレーションマフンは、子供達に人気は

もちろんの事、お孫さんと一緒に来ていたおばあちゃんが、家に残っている孫達の為にといて沢山買って頂きました。

販売を通して感じた事は、ハンガリー人の日本語を勉強している学生さん達が沢山いる事。学んだ日本語を流暢に使用して、寿司、お菓子、おにぎりを色々買って頂き、そして、おいしそうにその場で食べてくれる姿がとても嬉しかったです。

今年のバザーも、開場の1時間前から列を作ってバザーが始まるのを待って頂きました。各ブースでも、長い経験の各担当者が上手に時間をみて値引きなどを考えながら、商品の売れ残りがないように行う姿はたのしみと思いました。

その他、沢山のお父さん方の素晴らしい協力のおかげにより、準備の段階からの商品の倉庫への移動などの、重い荷物作業を率先して行って頂き、そして、当日の書籍のブースの担当を全て行って頂いた事に、お母さん保護者への配慮をととても感じ、ありがたい事だと思いました。子供達も楽しみながらお客さんと接している姿は、1つの社会勉強の場としてとても素晴らしい機会だったと感じます。バザー終了後、それぞれが率先しての片付けも手際よく、協力してすばやく行われました。本当に、何一つ無駄のない、素晴らしいチームワークで大成功のもと幕を下ろす事ができました。

このみどりの丘日本語補習校のバザーは、補習校の運営費として役立つ一方で、保護者同士の団結、子供達の社会経験としてとても良い経験になる機会だと思いました。初めてこのバザーに来て頂いた人から、後で、このバザーの事を会社の人達に話しをしたら、来年は是非来てみたいと言って頂いた人達が沢山いたと教えて頂きました。これからも、沢山の人達にこのみどりの丘補習校のバザーを知って頂きたいと思います。そして、既存のお客様のみならず、新しく沢山の人に、来場して頂けたらうれしいです。
(ふかまち・やすこ)



コルナイが綴る 20 世紀中欧の歴史証言

池田信夫「21世紀最初の10年ベスト経済書」第2位にランク
「週刊ダイヤモンド」2006年ベスト経済書第9位にランクイン

コルナイ・ヤーノシュ自伝

—思索する力を得てコルナイ・ヤーノシュ【著】 盛田常夫【訳】

◆好評発売中！ ◆定価 4935 円（税込） ◆A 5 判 / ISBN 4-535-55473-0 日本評論社



体制転換の経済学

黄色の教科書シリーズで知られる専門学部の定番テキスト。体制転換の理論と転換直後の現状を分析。各大学で教科書として使用。

盛田常夫著

第一部 社会主義経済の失敗

社会主義崩壊をもたらした社会的退化への論理を構築。交換経済と再分配経済の比較分析に新たな視点を提供。

第二部 ポスト社会主義経済

体制転換の過渡期の問題をすべて取り上げ、解決の道筋を示す。地域による体制転換の違いを解明。

■新世社 新経済学ライブラリー20 定価2781円(税込)



なぜハンガリーは独創的な科学者を輩出したのか

20 世紀を創ったハンガリー人 マルクス・ジョルジュ【著】 盛田常夫【編訳】

■定価 3045 円（税込） A 5 判

■ISBN 4-535-78331-4

異星人伝説

「週刊文春」(米原万里)、「週刊ダイヤモンド」(北村伸行一橋大学教授)で書評。
ハンガリーは 20 世紀の科学の発展に貢献した多くの頭脳を輩出した。大きな足跡を残した科学者たちの評伝。



体制転換20年の歴史的・理論的総括の書

ポスト社会主義の政治経済学

体制転換20年のハンガリー：旧体制の変化と継続

新しい概念を駆使して、体制転換以後の中欧社会の状況を分析。

日本経済新聞(2010年3月21日)ほか、多数の書評。

旧来の定説を覆し、新たな知見を広める革新の書。

盛田 常夫著 日本評論社 定価3800円

